

詠 詠 集

十二月号



花鳥諷詠®



令和3年12月 ■ 第405号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	稲畑 汀子	2
	今井 肖子	4

虚子研究 虚子宛書簡を読む (二十九)

明治二十五年七月三日虚子宛遠藤太松書簡 封書

.....	棕 誠一郎	7
-------	-------------	---

虚子研究 『六百五十句』研究 (23)	14
---------------------------	----

虚子を語る 深見けん二氏 (後編)	19
-------------------------	----

新刊紹介	24
------------	----

この人の作品	古賀しぐれ	25
--------------	-------------	----

一頁の鑑賞	長谷川禎子	26
-------------	-------------	----

西田 梅女	27
-------------	----

風報	28
----------	----

カレンダーこぼればなし③	30
--------------------	----

地区行事開催日程表	31
-----------------	----

編集後記	32
------------	----

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

稲畑汀子選

特選五句

一葉舞ふ影には風の色のあり

千葉高橋靖夫

星飛んで青みがかつてゆく夜空

八代山下しげ人

打水や庭のものみな威儀正す

安来細田洋子

夜学子の校舎を出れば先づ星を

八尾窪田由紀子

花野歩すいつしか歩幅小さくなり

小樽山下節子

二句短評

一句目——一葉の揺れを捉えた瞬時。風の揺れる影で捉えている秀句。

二句目——星が飛ぶと言うだけで空の色の変化を楽しんでいる作者。

入選六十句

語り継ぎ詠み継ぎ終戦記念の日 鳥取 宮脇 典子

野の色に沈む秋蝶飛び立てり 金沢 金子 慶一

路地裏は記憶のままや鳳仙花 神戸 影山 里美

灯を消せば山の我が家の銀河濃し 豊中 山下 幸典

幾度も富士振り返る避暑名残 香芝 芳林 淳子

偲びつつ母の句帳を土用干丸亀 片山 千鶴

送火の跡を鎮めて夜の雨 高松 金沢 正恵

秋思には触れず白寿の姉へ文 西宮 本郷 桂子

山荘に境界あらずほたる草 福岡 沖永 洋美

風韻を裏に表に一葉落つ 荒尾 大川内みのる

充実も悔いも一日や酔芙蓉 神戸 澤田 鈴子

六甲涼し百万ドルの生活の灯 神戸 中井 陽子

カンナ咲く二度も休憩とる散歩 宇部 萬 洋子

法師蟬風聴くやうに聞いてをり 大牟田 西坂美也子

ハンカチを握りしめ聴く話かな 福山 貝原 玲子

集落のありしは昔葛の花 鳥原 三好 勝利
 虚子館を開けて白露の風通す 神戸 平田 惠
 幸せと思へば思ふ爽やかに 青森 長島 喜美
 また不安二百十日も過ぎたるに 七尾 田辺 国和
 終戦日苦難の戦後思はばや 福岡 三坂 一生
 寂しさの深みに溺れ虫の闇 神戸 岩水ひとみ
 応対の涼しき店や又訪はん うきは 宮崎みゆき
 会へぬ子の方へ伸びゆく鰯雲 春日 永利五十鈴
 露けしや俳誌に残る戦場句 長岡 安井 里子
 山ひとつ覆ふ勢ひ真葛原 芦屋 門脇 重子
 長生きの秘訣はおしやれ夏帽子 宇佐 尾崎 陽子
 乱れぬし萩夕闇に力抜く 小樽 遠藤 嶺子
 露踏みて歩幅の戻る試歩の径 豊後高田 大波多美妃
 けぶり咲く合歓に音とはならぬ雨 鹿児島 永井 紀子
 雨後の匂ひしづもる稲の花 高松 井口 直美

灯を消して音近くなる秋の雨 下関 中村 元代
 二つの灯点る夜学の校舎かな 静岡 堀内 智子
 露けしやふる里は墓残るのみ 長岡 佐藤 文子
 高速を下りて青田の風入るる 大分 橋本 照子
 波音の変わりあるとき秋の風 高松 岩瀬由美子
 炎昼を来て荷崩のごとく坐す 宇佐 磯永喜八郎
 手伝ふも継ぐとは言はず稲を刈る 七尾 坂下 成紘
 踏破せし嶺々を車窓に秋晴るる 瀬戸 小笠原富美子
 まだ風の揃はぬ朝の芒原 十日町 富井千鶴子
 風の譜にふれては揺るる秋桜 筑紫野 宮田 良子
 遠富士の暮れて山路の月見草 石川 駒形 隼男
 木の実落つ音の前にも後ろにも 一宮 佐々 房子
 コスモスの色に分け入る仏道 木津川 松山 寿美
 唐黍の届く重さと蝦夷の香と 郡山 佐々木君江
 一粒の音に始まる夕立かな 福岡 森 順子

なほ奥へ萩のこぼるる風の径 加吉川 岩城 久美

虚子の世を垣間見てをり夜長の書 立川 日置 正樹

森の香の昨日より今日風は秋 能美 早瀬 貞子

来し方の沙汰を浮かべて水澄める 岡山 名木田純子

地の果ての砂をみがきし星月夜 神戸 松本みず代

先人の庭引き継ぎし油点草 高松 福濱 政美

あちこちに木犀香る街に住み 金沢 宮村 啓子

新涼や難問すいと解ける朝 神戸 大西美紗子

消えてゆく物音ひとつ秋の暮 高松 浅野クニ子

山住みの早起眠りや星月夜 神戸 長谷 元子

又出会ふことも花野の径なれば 淡川 今井 蓼子

雨霽れて光の海となる花野 神戸 明石 裕子

初秋のひとすぢの風見えるごと 大分 峯戸松祥子

大和路の日の斑ぬければ芒原 京都 木村 直子

秋涼し独りの夕餉手間かけて 高松 岩瀬 良子

● 今井肖子選

特選五句

星飛んで青みがかつてゆく夜空 八代山下 しげ人

少年の背中大きく晩夏かな 龍ヶ崎 油 原 めぐみ

虫の声聞いて二人の茶漬かな 大阪大川 隆 夫

草原に夢見る牛や銀河濃し 高松 森 本 添 水

花茗荷雨の暗さを保ちたる 高知 河野 紅 柳

二句短評

一句目——流れ星がよく見える場所であれば、空はた
くさんの星をちりばめながら漆黒。やがて流星群なの
でしょうか、星が飛び始めた空の光の余韻を「青みが
かつてゆく」とは繊細です。

二句目——夏休み明けの教室は、一か月ほど会わない
うちにどことなく大人びた気する顔がそちこちに見
受けられたりもします。そんな成長期の少年の、たく
ましさが少し眩しくもある背中。

入選六十句

秋風や心機一転するつもり 名古屋 波多野富代子

窓閉めるその一瞬の夜の秋 横浜 竹田登代子

路地裏は記憶のままや鳳仙花 神戸 影山 里美

送火の跡を鎮めて夜の雨 高松 金沢 正恵

全長を晒し日向の穴惑 富田林 尾崎 千鶴

小鳥来る水の惑星ただならず 福島 坂野 洋三

子の残しゆきし風鈴たまに鳴る 福山 佐藤 浩子

灯台も船も点景海の秋 輪島 向 佐ち子

うつむくも仰ぐも祈り沙羅の花 札幌 押野 美江

遺されし夫の庭下駄盆の月 高崎 並木 秋野

噴煙の白より白し秋の雲 松原 加藤 あや

ビル街の隙間隙間に雲の峰 白山 中川外代子

師の稿に記憶まさぐりゐる曝書 福岡 島原 仁代

人出なきねぶた月夜でありにけり 平川 丹野 慶子

二百十日火曜日の晴れ上がる 岡山 井上 幹彦

集落のありしは昔葛の花 島原 三好 勝利

草の花十戸の村をつなぐかに 高槻林 曜子

秋風や淋しくなれば散歩して 砺波 田上真知子

さやけしや形見となりし父の杖 長岡 桑原たかよし

水引きて秋津の野辺となりゐたり 大阪 福本めぐみ

君逝くや鳴きはじめたる草雲雀 幸手 中野 典子

花野歩すいつしか歩幅小さくなり 小樽 山下 節子

終戦の日や語らねば祈らねば 福山 久保 絃子

門ばかり残る廃寺や草の花 神戸 前田 容宏

大夕立右折禁止の道ばかり 半田 加藤 清美

香水を鏝ひ田舎に老いてゆく 香川 湯川 雅

日向にも闇の入口曼珠沙華 高松 高橋 遥

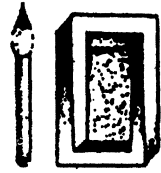
乳飲み子を筵に仕事豊の秋 草津 田中 幸湖

波立てぬ高飛び込みの涼しさよ 徳島 遠藤 和良

水音へ秋めいてゆく歩みかな 八代 山下さと子

盆供養夫の遺影の若きこと 福岡 徳永スキ子
 長生きの秘訣はおしやれ夏帽子 宇佐 尾崎 陽子
 ひぐらしの中ゴンドラの下りゆく 大阪 山内 繭彦
 長風呂の愉しさもまた虫時雨 伊万里 達 信子
 缶コーヒー飲み干す視線秋の空 福山 早間 幸枝
 けぶり咲く合歓に音とはならぬ雨 鹿児島 永井 紀子
 書き終へてペンを置く音秋冷ゆる 高松 荒井多美枝
 灯を消して音近くなる秋の雨 下関 中村 元代
 見てゐるやうで見てゐないとんぼの目 金沢 村上 秀吾
 身に入むや戦火の中のホトトギス 兵庫 今地千鶴子
 桃の傷剥いても残る深さかな 横浜 守谷 一劍
 高速を下りて青田の風入るる 大分 橋本 照子
 草を引く元気ある内朝の内刈谷境 雅代
 寂しさを野辺に広げて尾花揺れ 山口 藤岡いく子
 まだ風の揃はぬ朝の芒原 十日町 富井千鶴子

色揃ふことなく桜紅葉散る 高松 和泉 金子
 露の世や想へば白寿目前に 福山 楨岡 義道
 一粒の音に始まる夕立かな 福岡 森 順子
 髪切つてをさまりの良き夏帽子 鳥取 砂流 育子
 ちちろ鳴く湯船に母を抱くとき 安中 多胡恵美子
 雨の輪の中より鯊の釣り上がる 尾張旭 佐藤 武彦
 なほ奥へ萩のこぼるる風の径 加古川 岩城 久美
 掃除機を止めて黙禱原爆忌 福山 来山 静子
 風飾るやうに七夕笹飾る 吹田 生澤 瑛子
 これよりはエプロンはづし秋灯下 春日 牟田 節子
 露けしや欠伸のあとの涙にも 横浜 秋間 玲子
 新涼や難問すいと解ける朝 神戸 大西美紗子
 山住みの早き眠りや星月夜 神戸 長谷 元子
 一言を添へて夜食を置きくれし 島原 八木 花栗
 虫の音を乱さぬやうに庭歩く 井原 片山 千代



編集後記

冬枯の道二筋に別れけり

虚子

虚子二十歳、いわゆる「道灌山事件」の一年前に作られた句である。二十歳の若者の前に広がる二筋の道。選ばなかった方の道とは何だったのだろう。

●令和三年もあとひと月となりました。昨年に引き続きコロナ禍で終了してきたこの一年。なんとか帳尻を合わせなければという思いでいっぱいです。新年早々には協会賞の選考、今年度の第二回の理事会などの行事も控え

★ご寄附いただいた皆様★

今年度は匿名希望の方を含め59名の方より418,000円のご厚志をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

宮村 啓子 細井 路子
今中榮三郎

敬称略・順不同

寄附金申込書と入金を確認でき、申込書の「機関誌への掲載可」にチェックされている方のみ掲載しています。

花鳥諷詠十二月号(通巻第四〇五号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇,〇〇〇円

令和三年十二月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目一八十九

シャンブル笹塚二丁目B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二

須川 久

ています。皆様へのご報告もできるだけ速やかに行うつもりですが、行き届きませんところは何卒ご容赦ください。
●来年の全国大会は、九月十八日(日)十九日(月祝)に北海道支部主管で、十勝で行う予定です。大自然とおいしい食材、リアルでの吟行ができますように願っています。

●編集後記に記名するよう指摘されましたので今月より実行します。